

憧れて来し丘の上や



旧理学部正面（西大畑）（コンピュータによる合成写真）
（写真提供 化学科技官 松田義明氏）

会報

第 3 号
1996. 10. 25
新潟大学
理学部同窓会

新潟大学理学部 同窓会に寄せて



副会長 有 磯 邦 男
（物理科第一回卒業）

「井戸水を飲むときは、その井戸を掘った人の苦勞を偲べ」といわれる。
理学部だけでもすでに四、五人の卒業生を社会に送り出した我々の学び舎新潟大学も、その設立期には予算面や立地場所の問題など解決しなければならぬ色々な問題を抱えていたとのである。

我々の先人は、（旧制の）高等学校を新潟に誘致した大正の頃からずっと、地域における高等教育の必要性を強く認識し、政・官・財界が協力して今日の高等教育機関の誘致と整備に努めてこられたのである。

そして当大学が常に地域の高等教育機関の最先端にあつて質的・量的に益々発展を続けていることは誠に喜ばしいかぎりである。
さて、最近では地元企業や官公庁のトップクラスの人達の中にも大勢の当学卒業生が見受けられるようになった。

初対面の人と話しているうちに、相手も同じ新潟大学出身と分かる。何となくホッと気の休まるような気持ちになるものである。それが、学部まで同じ時には一層の親近感が湧いてくる。
「あの先生はどうしておられる」、
「あの人はどうなった」などといった共通の話をしているうちに、ずつと以前からお付き合いしてきた間柄になってしまふのである。

話は変わるが、私立大学の同窓会組織は一般に強固である。また、国立の場合でも、例えば本県における九州大学の会のように強いつて結ばれているものもある。
当学部の首都圏同窓会もまた、新潟でのそれよりも活発に活動している。
やはり、故郷は遠くにある方が思いが強くなるからであろうか。
この世の中、自然科学を対象とする学問を学んできたからといって、

人との係わり合いなしに生きていくことはできないことである。そんな世の中で先輩・後輩のさやかな、そして純な絆に感謝することができればそこに同窓の意義が見出だせるのではなからうか。
また、自分の専攻した分野での知識、あるいは社会で得たものを広く地域に還元する気持ちの中にも、学校を含めた故郷を思う温もりのある気持ちが感じられるのである。

二十一世紀の新潟県はどういう人達がリーダーとなって、どういう方向へ発展していくのであろうか。一人一人の主義主張に違いはあつても、やはり新潟大学とその卒業生が新潟県の中核のリーダーとなって活躍する時代がそこにあると思うのである。

新潟大学の学部別累計卒業生数
1回（28.3）～44回（H8.3）

学部	累計
理学部	4,515
文学部	13,513
法経学部	16,497
教育学部	4,255
医学部	1,407
歯学部	12,703
工学部	5,041
農学部	57,931
合計	57,931

思い出を語る

新潟大学創設期の

西大畑キャンパス

新潟大学名誉教授

(地質学) 芽原 一也



近刊の「繚乱―西大畑の青春旧制新潟高校の残照―」野尻守利著を読んだ。懐しいことが沢山述べられていて本当に興味深いものがあった。新潟大学理学部は昭和二十四年、旧制新潟高等学校の校舎をそのまま利用して発足した。そのうち地質鉱物学教室(初代教授は杉山隆二先生)は生物学教室の南側の二室を使って発足した。室だけから見ると生物学教室の居候みたいなものであった。この室は本館と六華寮をつなぐ長い渡り廊下を曲るとすぐの所にあった。二室のうち一室は旧制高校時代の地鉦教室の教授室であった。床に

はりノリルームが張ってあり、机その他の調度品は昭和前期の面影を残す「がっしり」した立派な木製品であった。旧制高校時代の物理・化学・生物などの特別教室(研究室および階段教室)は本館とは別棟で三つ別々にならんでおり、これらは先に述べた渡り廊下で結ばれていたのである。この渡り廊下を旧制高校生達は朝な夕なに通り抜けたであろう。数学の研究室は本館二階にあった。地質鉱物学教室はやがて教官の増えると共に、本館一階に何室か利用して移った。北側隣りは図書館であった。地鉦教室の特色である岩石薄片製作室(主任は故斉前清二氏)は講堂脇にプレハブ造りで新しく設置された。地鉦教室はかつて徳重教授(旧制高校時代の有名な先生)

が熱心に整備されたお蔭で、高校にはめづらしく偏光顕微鏡が20台も備っていたのである。第一回の新入生の中には既に故人になられた人もいる。本館の古い校舎の室で、対一の教育が行われた。各教室の机には旧制高校生の彫ったもの、落書などがあり、旧制高校の面影が色濃く残っていた。

私の若い助手時代はこうして始まったのであった。(懐キタツク最高技術顧問)

澤木先生との

出会い

数学科七回卒

大澤 正



私のお会いした時、知性的で教養のあふれるまさに大学教授にふさわしい高潔な印象を受けたものである。だから先生を尊敬する心と教えを受けたいと願う気持ちはずっと変わることなく続いた。そして最終学年を前にしてゼミを決める時期になり、私は幸いに澤木先生のゼミに入ることができた。そのゼミは渡辺道昭君と伊藤道一君との三人である。助教教授と呼ばれるほど数学の優秀な渡辺君、英語力が抜群の伊藤君と一緒に私は厳しいゼミであったが、気心の通じ合った親友同志の我々は澤木先生を囲んでの楽しいゼミを一年間

続けた。特に私にとって楽しかった思い出は名古屋出身の伊藤君が帰省帰りに持参する名古屋名物の「ういろ」である。ゼミの途中に伊藤君が先生にそれをお土産として差し出すと、先生は「有り難う。それでは一息いれましょう。」と言ってお茶とういろを我々にご馳走してくれるのである。そしてその日はよもやま話ゼミが終わる。年も変わりゼミの最終日を迎えると、先生は我々三人をねぎらって家に招き最後の晚餐をもてなしてくれた。そして夕食の後は京美人と噂の高い憧れの奥さんが我々のためにお茶を点ててくれた。その日は学生時代最後の素晴らしい夜を過ごした。

私の結婚披露宴には言うまでもなく澤木先生にご臨席をお願いした。その時先生からいただいた「数学の目的は調和の美の発見にあり」といわれている。結婚においてもまた然り」の言葉は私にとつて忘れることのできないものとなった。先生ご夫妻はいつも互いに優しくいたわり合う仲の良い理想的なご家庭を営まれておられる。私もその日以来そのはなむけの言葉を人生の指針として心に深く刻み込み、家庭内だけでなく私を取り巻くすべての人と、調和の美を求め続けて生きていきたいと今でも願っている。

退官された先生

西村浩之先生(物理)

在職期間

昭和42年4月～平成8年3月

鈴木俊雄先生(化学・自然環境)

在職期間

昭和35年4月～平成7年3月

新潟大学名誉教授

広川豊康先生(生物)

在職期間

昭和35年2月～平成7年3月

新潟大学名誉教授

本間義治先生(生物)

在職期間

昭和25年3月～平成7年3月

新潟大学名誉教授

植村 武先生(地質)

在職期間

昭和42年12月～平成7年3月

新潟大学名誉教授

相川豊夫先生(教養・自然環境)

在職期間

昭和56年12月～平成7年3月

辞職された先生

渡辺誠治先生(数学)

在職期間

昭和43年3月～平成7年3月

新潟工科大学教授

(平成7年4月1日付)

理学部の近況

第二号に理学部の最近の改革状況が述べてあります。第二号が発刊された時点では、理学部の改組に伴って新設された自然環境科学科が発足したばかりでした。また大学院の改革は計画段階のものでした。今回は、理学部の近況としては自然環境科学科を絞って、その後の状況を述べます。さらに大学院改革について若干触れます。

新たな自然環境科学科ができれば学生の数も増えますので、新たな講義室・実験室をという事で、新しい建物を要求しましたが、諸般の事情でまだ認められていません。今までの二年間は他学科や教養舎の施設を借りての講義・実験をやらざるを得ませんでした。自然環境科学科ができてから三年目（一・二三年生がおります）ともなると、学科独自で使える施設がどうしても必要です。そこで理学部長はじめ他学科の協力を得て、新しい建物ができるまでの一時的な処置として、講義室として大會議室を、学生実験室として職員休養室・学生休憩室をあてることになりました。まだまだ不十分です

がやつと学科としての体裁が整いつつあります。自然環境科学科はご存じのように、教員は教養部に所属していた人たちと、理学部の物理・化学・生物・地質科学科からの人たちが構成されています。教員研究室はまさにモザイク模様のようにあちこちに点在しており、学科として核になる場所がありませんでした。これは学生の目には異常にうつっていたようです。そこで講義室や実験室といった施設の整備と並行して、一部だけが教員研究室の移動も行ない、教養舎内に化学系、生物系の教員研究室の集中化が行なわれました。大学院改組について述べます。

理学部に所属していた理学研究科（修士課程）がなくなり、工学および農学研究科と統合され自然科学研究所の前期課程となりました。新潟大学の自然科学系の大学院は前期課程（修士）、後期課程（博士）と一貫した総合大学院になったわけです。そして大学院の定員も大幅に増えました。大学院は現在も改革過程ですので、いま組織などを述べる段階にないと思えます。次の機会に譲ります。

昭和二〇年春、敗色濃厚な戦況下、学徒動員で新潟鉄工で働くことになり、特殊潜行艇用ディーゼルエンジン仕上係に配属された。仕事はあまり忙しくなく、昼休みにはホグベンの「市民の科学」や自然科学関係の本を読みあさった。学生担当の方が「科学を深く理解するには数学や物理を勉強しなさい。」と言われ、高等学校（旧制）の教科書を持ってこられた。訳も分からずに夢中になって読んで、灯火管制下の夏の夜空を彩る星座や天の川を眺めていると、宇宙の神秘と美しさの魅力に引き込まれ、星の成因、エネルギー源などに興味を持った。これが物理学の世界に足を踏み込むきっかけになった。戦後、学制改革が行われ新制大

リレー会員だより

私の放射線とのつきあい

物理一回 昭和28年卒
加藤義雄



学が発足し、運良く物理学科に入學した。四年のとき、佐藤磐根君とX線回折実験を数ヶ月間やった。裸のX線管球で試料を照射中、その場で仕事をしていた。X線の被曝をかなり受けたと思われる。卒業当時は就職難時代だったが、主任教授の田中努先生から「これからの医学は物理学を必要とするようになる。君たちは医学の分野で仕事をするように。」と言われ、医学部の助手になった。山本武君は精神神経科（後、工学部精密機械科助教、故人）、中山高君は生化学教室（後、三菱重工工場長）、そして私は薬理学教室に入った。薬理学教室では実験用機器の製作とそれを使った実験を細々とやっていた。一九五五年頃、放射性同位体が医学の分野で使えるようになり、昇永の体内挙動を ^{203}Hg で標識した昇永（ $^{203}\text{HgCl}_2$ ）で調べる。 ^{203}Hg は 0.213MeV β線と 0.279MeV γ線を放出するが、薬学の先生と二人で放射線の防護もせずに、放射性硝酸水銀から昇永をつくった。

叙勲の栄に浴された先生

野本 森萬先生（生物）

勲二等瑞宝章 平成7・4・29

村川新十郎先生（生物）
勲三等瑞宝章 平成7・11・3

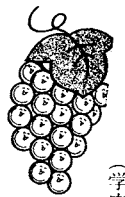
小林 武先生（化学）
勲二等瑞宝章 平成8・4・29

茅原 一也先生（地質）
勲二等瑞宝章 平成8・4・29

死亡者叙勲の栄に浴された先生

野田 光蔵先生（物理）
正四位 平成7・4・3

小山誠太郎先生（化学）
正四位 平成7・10・18



（学内幹事）

首都圏同窓会も

頑張ってるぞ!

化学科 (九回生)

田才邦彦

新潟大学理学部首都圏同窓会も今年で第十一回を迎え、過日滞りなく終わりました。

ところで、わが首都圏同窓会もご多分に洩れず持ち堪えるのに腐心しております。

まず一つは、特に若い後輩らにも大勢集まってもらいたいことです。そこで、魅力溢れる集いのように、各学科の代表に高話を頂くイベントを催しており、今年五回目になりました。時宜に合った話題が提供されており『サイエンスセミナー』として他学部などにも声を掛けるのが懸案となっております。

もう一つの悩みは懐具合です。八百名からの皆さんにご案内して集まるのは高々一割程度で、梨の礫も五割はおりません。出席される皆さんの会費から一切の費用を捻出しており如何にも理不尽といわねばなりません。

こうした課題を抱えつつも、わが首都圏同窓会は頑張ってます。ご声援をよろしく。

サイエンスセミナー講演者／要旨一覧

学 科	講 演 者	内 容
生物学科	相馬 研吾	「植物の生命力」 動物には見られない植物固有の体制や生きざまについてお話しされます。 経歴：昭和28年 生物学科卒業 昭和33年 東京大学大学院終了。(理博) " 東京教育大学理学部植物学助手 昭和48年 東京水産大学教養科助教授 昭和52年 同大学教授 平成6年 定年退職。(同大学名誉教授)
地質鉱物学	平井 明夫	「最近の石油成因論と石油探査」 石油は複現岩中で生成し、貯留岩に移動し、トラップに集積して保存されるというお話しから始まり、現在ではケロジェン線測定に立脚して石油探査が行われているというお話しをされます。 経歴：昭和49年 新潟大学大学院理学研究科修士課程終了(地質鉱物学専攻) " 帝國石油(株)入社 昭和58年 オマーン石油開発(株)に outward、翌59年帝國石油(株)に復職、技術研究所 平成3年 阿社技術研究所主任研究員、現在に至る
数学科	高橋 哲夫	「インターネットの動向について」 今話題のインターネットについて、仕組みと利用領域についてお話しされます。 経歴：昭和42年 数学科 卒業、同年 日本電気(株) 入社。 昭和61年 システム技術本部 開発部長。以後アプリケーション事業部を経て現在、コンピュータソフトウェア事業本部 P/P 事業推進統括部長
物理学科	金沢 光隆	「加速器 - ガン治療への応用」 最近の加速器とその使われ方について、HIMAC (Heavy Ion Medical Accelerator in Chiba)を使用したガン治療の現状を中心にお話しされます。 経歴：昭和50年 物理学科 卒業 昭和52年 新潟大学大学院理学研究科 修士課程 昭和55年 東京大学大学院理学研究科 博士課程(理博) 昭和55年 東京大学原子核研究所。以後、放射線医学総合研究所、フランス・サクレ、サターン国立研究所を経て、現在、放射線医学総合研究所・医用重粒子線研究部主任研究員
化学科	村川 恭平	「海外の環境関連法規の動向について」 公害防止技術では先進国の我が国の法的不備が指摘され、被害者救済に對して差れを取っている現状に鑑み、米国・韓国・E.Cなどにおける環境関連法規の現状を紹介されます。豊富な経験と調査に基づくその一端をお話しされます。 経歴：昭和29年 化学科 卒業。 " 富士通(株) 入社 以後、富士通研究所、富士電気化学(株)取締役 富士電化環境センター社長を経て、'95年退職

第11回 新潟大学 理学部 首都圏同窓会(報告)

- (1)日時：平成8年7月13日(土)午後1：30～
- (2)場所：エステック情報ビル(工学院大学キャンパス)
- (3)会費：1万円 (但し女性7千円)
- (4)次第：①各科講師による高話：13：30～16：00
・話す時間25分／1人
②総 会：16：00～16：30
③懇談会：17：00～19：00

今年は、田中謙輔先生(数学科教授)をお迎えし、上記の通りセミナー、総会、懇談会が盛大に行われました。



「サイエンスセミナー」の聴講風景

各科連絡先

【各科同窓会事務局連絡先】

数学科 高橋芳延
電話 ○二五―二七六一―二九七七
物理・化学・生物・地質科学科については理学部内同窓会幹事宛
新潟大学理学部所在地
〒九五〇―一二二
新潟市五十嵐二の町八〇五〇

【住所変更等の連絡について】

住所・勤務先等の変更があった場合、速やかに各科学務局にお知らせ下さるようお願いいたします。

亡くなられた先生

- 水沢 英男先生(数学)
平成8年1月28日
- 小山誠太郎先生(化学)
平成7年10月17日
- 野田 光蔵先生(生物)
平成7年4月3日
- 相見 靈三先生(生物)
平成8年4月14日
- 津田禾粒先生(地質)
平成7年12月31日

役員紹介

- 会長 渡辺 昌吾(化学科)
- 副会長 有磯 邦男(数学科)
- 遠藤 昭一(物理学科)
- 広川 豊康(生物学科)
- 中山 輝也(地質科学科)

幹事

- 数学科 田中謙輔 磯貝英一
野尻和子 吉川益男
- 物理学科 高橋芳延
- 物理学科 矢野 教 高橋利保
金子恒雄 石田昭男
- 化学科 石塚紀夫 洞口高昭
逢坂勝也 植木幹男
長谷川周壽
- 生物学科 南雲照三 曾我 浩
田中秀夫 青木茂治
小林道頼
- 地質科学科 米沢富信 若井吾吾
若林茂敬 高浜信行
田沢純一